

キリスト教徒はイースターあるいは過越祭を 祝うべきでしょうか？

イースター（復活祭）はクリスマスと同様、あらゆる「キリスト教」の行事の中でも最大のものです。キリストの復活を祝うものとされていますが、それならば、なぜ、パウロは異邦人（非ユダヤ人）のキリスト教徒に、主が来られる時まで「主の死を告げ知らせるのです」と命じたのでしょうか？イエス・キリストご自身が、種なしパンの一切れは自らの体を、ワインの一口は自らが流された血を象徴していると言われて、かの有名な弟子達との「最後の晩餐」を祝われました。この晩餐は、全ての人類の罪のためのキリストの死を記念するものでした。キリストの復活を祝うための指示が聖書のどこにもないのはなぜでしょうか？使徒達が復活を祝わなかったのはなぜでしょうか？

「過越祭」は「ユダヤ人」だけのものであって、キリスト教徒は関係ないのでしょうか？キリスト教徒はイースターを祝うべきなのでしょうか？聖書はイースターを祝うよう命じているのでしょうか？この答えを知ると皆さんは驚かれるでしょう！イースターと過越祭に関する明白な真実は、皆さんの聖書にあるのです！

ガーナーテッド・アームストロング

皆さんは「既存の」世界に生まれました。習慣、伝統、宗教、政治がどのように世の中で構築されているかに関して発言権はありませんでした。両親が話す言語を2歳頃に学び、6歳頃に母国語の文字を、7歳か8歳頃に簡単な文章の読み書きを学びました。

しかし、読み書きを学ばずずっと以前、「調べる」ことや「学習」することを学ばずずっと以前の幼少期から、歯の妖精やサンタクロース、イースターバニーについて聞き、おそらく何百という漫画や子供番組をテレビで見てきたでしょう。皆さんが幼い頃から、ご両親は、伝統、習慣、寓話、迷信や教育方針を皆さんの心に植えつけてきました。

「イースター」やその他の宗教的習慣は、両親や保護者から最初に学んだのです。歴史を調べたり、事実を慎重に考察したり、「イースター」を祝う筋の通った判断をしませんでした。

キリスト教徒だと公言する西欧諸国の多くの大人たちには次のような眠い朝の記憶が残っています。午前3時か4時にわくわくしながらベッドから引っぱりだされて、女の子ならフリルのついたドレスを、男の子ならクリップ式の蝶ネクタイに真新しいスーツを着せられ、春らしい色の緑や黄色のエナメル靴をはき、何百あるいは何千もの人々が集う「復活祭早天礼拝」に参加するために、家の車に乗り込んで、野外スタジアムや丘の上に向かうのです。

皆さんは、「イースター(復活祭)」が何であるのかを理解していませんでした。イースターという音が方位磁石のイースト(東)のように思われただけでしょう。もちろん、太陽は東から昇りますから、そういうことだったのでしょくか？あるいは、単に「ウェスター(西方向に向く)」の反対だったのでしょくか？大抵の場合、他の大多数の人達同様に、その意味を百科事典で調べてみようとは思わなかったでしょう。私達は自分の周囲の環境を当然のことだと考えがちです。

皆さんは、イースターの歴史や起源を調べてみたことがありますか？

当然、クリスマスのように、イースターもローマ・カトリック教会からプロテスタント主義にまで見られますが、普遍的教会では、もっとずっと古代にその起源があります。

カトリック百科事典(Catholic Encyclopedia)では、イースター(復活祭)に関して次のように記しています。「ヴェン・ビード(Ven.Bede)の時間の計算(De temporum ratione. I巻5章)によると、英語のイースターという語は、チュートン人の夜明けや春の女神、エオストレ(Eostre)に関連している。使徒的教父(キリストの使徒達)はこれに言及しておらず、我々は十四日派の議論を通じて、単なる偶然として最初にこの語を耳にする」(カトリック百科事典 第5巻 224 ページ)

「チュートン人の夜明けや春の女神」とありますが、エオストレには単なる多神教の夜明けや春の女神以上の意味があります。彼女は、迷信的な異教徒の奇妙な考え方では、性交と多産、繁殖力と生殖力の女神でした。エオストレの最も重要なシンボルは卵で、次いでウサギでした。当然ウサギは卵を産みませんが、多くの子供達は大きくなってからこのことを学びます。

幼い子供達にとってウサギはとても可愛らしいものです。小さなニワトリやカラフルに色づけされた卵も同様です。イースター・エッグ(卵)について、カトリック百科事典では、不本意ながら次のように認めています。「その習慣の起源はおそらく多神教信仰にあるだろう。多くの多神教の習慣では、(太陽信仰に直接関わる)春の再来を祝い、これがイースター(復活祭)へと自然に結びついていった。卵は早春の命の芽吹きを象徴し…イースターのウサギが卵を産むのは、その卵を巣や庭に隠すためである。ウサギは多神教では常に多産を象徴していた。フランスでは、ボール投げ遊び(handball playing)がイースターの遊びの一つで、これはドイツでも見られるものだった…ボールは、復活祭の朝に飛び跳ねるように三段階で昇ると信じられている太陽を象徴しているのだろう」(同書 227 ページ)

多数の「奇妙な」習慣が古代の迷信や神話に由来しています。その殆どが欲を中心とした、多産の儀式的な習慣として行われたのは明らかです。カトリック百科事典では、次のように記述しています。「イースター・マンデー(復活祭の月曜日)には、女性は夫を叩く権利があった。火曜日には、男性は妻を叩いたが、それは12月に召使が主人を叱るようなものだった…イングランド北部では、男性はイースター・サンデー(復活祭の日曜日)に通りを行進し、女性を地面から3回持ち上げる特権を主張してキスしてもらったり、6ペンス銀貨を受け取る。ノイマルク(ドイツ)では、イースターの日、男性召使が女性召使を小枝でむち打ち、月曜日に女性召使が男性をむち打つ。彼らはイースター・エッ

グを撒くことを始めている。こうした習慣はおそらく紀元前にその起源があるのだろう」
(同書 227 ページ)

このような多くの儀式は、多神教の多産の儀式として太陽信仰から派生しました。例えば、前掲書では次のように記しています。「山の頂上にイースター・ファイヤー（復活祭の火）が灯されるが、それは摩擦によって木におこされた新しい火から点火されなければならない。これはヨーロッパ各地で流行している多神教を起源とする習慣で、春が冬を克服したことを表わしている...教会は砂漠の火柱やキリストの復活にこれを関連づけ、イースターの儀式を祝うことを取り入れた。」
(同書 277 ページ、強調は筆者)

イースターを取り入れたことを認めた点は、問題の核心となりますので、十分注目してください。

では、「イースター」という名称の起源に注目しましょう。ヒスロップは次のように記しています。「イースターはキリスト教の名称ではない。その始まりは、カルディア教に起源がある。イースターは、女神の称号の一つである天の女王アスタルテ (Astarte) に他ならず、その名は (古代アッシリアの首都) ニネヴェの人々が発音していたように、現在一般的に使われている名と明らかに同一である。その名とは、レイヤードが発見したアッシリアの石碑に記されていたように、イシュタル (Ishtar) である」(二つのバビロン、ヒスロップ著 103 ページ)

イシュタル (Ishtar) の「h」は、アッシリア人が「Astarte」(アスタルテ) と発音していたように無音となり、最後の二つの文字「ar」も無音となります。すると、現在使われている「イースター」と同じ発音となります。

「イースター」の前に40日間の「四旬節 (Lent)」があることは、多くの人を知っており、またそれを守っています。しかし、「四旬節 (Lent)」の起源はどこにあるのでしょうか? 「貸す (lend)」の過去形でしょうか? お臍のゴマ (lint) のようなものでしょうか? 聖書には全く見当たりません!

ヒスロップに答えてもらいましょう。「40日間の四旬節の節制は、まさにバビロニアの女神信仰から取り入れられた。「春」の40日間の四旬節は、ヤスディ教やクルドの魔王崇拝者によっていまだに守られている。彼らはその習慣を昔の支配者であるバビロニア人から受け継いだ。このような40日間の四旬節は、ハンボルトの著書 (メキシコの研究: Mexican Researches, 404 ページ参照) に記載されているように、多神教のメキシコ人が春に行っていた。ハンボルトは、メキシコ人の行事について次のように説明している。「春分の3日後...太陽に敬意を表わして40日間の厳粛な断食が始まる。」ウィルキンソン著、エジプト人 (Egyptians) に見られるように、このような40日間の四旬節はエジプトでも行われた。この40日間のエジプト人の四旬節は、ランドシーアの著書、シバの研究 (Sabeen Researches) に書かれているように、死と再生の神、アドニスやオシリスへの崇拝として行われた」(同書、105 ページ)

「イースター」は野卑な多神教を起源としているのです。「けれど、私達はそのような多神教の意味を念頭に置きながらイースターを行っているではありません」と反論する人もいるでしょう。当然です！それが核心なのです！それこそ魔王が人を欺き、騙すのに用いる、偽り、ごまかし、見せかけであり、真実から目を背けるものです。

ヒスロップは次のように述べています。「多神教とキリスト教との折り合いをつけるために、ローマは、いつものやり方で、キリスト教と多神教の祝祭を融合させるという手段をとった。それは、複雑ながらも巧妙に曆を適合させることで、難なく、多神教と、多くの点で偶像崇拜同然に陥ったキリスト教が手を握るようなものだった」（同書 105 ページ）

全能の神は、ご自身の民が多神教の儀式や祭式を真の神への信仰に「取り入れ」たことを、何と言われているでしょうか？「あなたが行って追い払おうとしている国々の民を、あなたの神、主が絶やされ、あなたがその領土を得て、そこに住むようになるならば：

「注意して、彼らがあなたの前から滅ぼされた後、彼らに従って罠に陥らないようにしなさい。すなわち、「これらの国々の民はどのように神々に仕えていたのだろう。わたしも同じようにしよう」と言って、彼らの神々を尋ね求めることのないようにしなさい。

「あなたの神、主に対しては彼らと同じことをしてはならない。彼らは主がいとわれ、憎まれるあらゆることを神々に行い、その息子、娘さえも火に投じて神々に捧げたのである。

「あなたがたはわたしが命じるこのすべての事を守って行わなければならない。これにつけ加えてはならない。また滅らしてはならない」（申命記 12章 29～32節）

イスラエルがエジプトで奴隷状態であった間に一つの家族から民族へと徐々に拡大していった際、イスラエルの民は墮落した野卑な多神教に囲まれていました。太陽や月、そして星は、ナイル川やワニから黄金虫まで様々な生き物の姿と同様に崇拜されていました。神は怒りを示され、エジプトの「神々」を疫病で打ちのめされました。当時、世界最大の権力の拠り所を砕くことによって、エジプトの王に奴隷を解放させるだけでなく、エジプトの多神教の神々よりも神がはるかに優れていることを示されました。

イスラエルの民がエジプトから逃れた際、神は彼らがヒビ人、アマレク人、エブス人、エドム人、ペリシテ人、ペリジ人をはじめとする、太陽崇拜の多くの異教徒、多神教徒と出会うことをご存知でした。多神教徒達は皆、太陽崇拜や生贄という多産の忌まわしい儀式を行う事を常としていました。それは古代メキシコのアステカでも行われていました。

彼らは季節の移ろいに「驚き」、奇妙な儀式や生贄を捧げることによって、「太陽神」が再び温暖な季節への旅を始め、冬を「乗り越え」、命を支える作物が再び育つと信じていたので、月や惑星を観察し、「時期」や季節を把握したのです。

しかし、神は彼らに警告されました。「あなたが、あなたの神、主の与えられる土地に入ったならば、その国々のいとうべき習慣を見習ってはならない。

「あなたがたの中に、自分の息子、娘に火の中を通らせる者、占い師、卜者、易者、呪術師、

「呪文を唱える者、口寄せ、魔術師、霊媒（死者に伺いを立てて未来を予言する者）などがいてはならない。

「これらのことを行う者をすべて、主はいとわれる。これらのいとうべき行いのゆえに、あなたの神、主は彼らをあなたの前から追い払われるであろう。

「あなたは、あなたの神、主と共にあって全き者でなければならない。

「あなたが追い払おうとしているこれらの国々の民は、卜者や占い師に尋ねるが、あなたの神、主はあなたがそうすることをお許しにならない」（申命記 18章9～14節）

イースターもしくは「イシュタル」は、常に春に行われ、多産を象徴するものであふれています！多神教のバビロニア人、ギリシャ人、ローマ人の太陽信仰から持ち込まれたのです！その象徴はイエス・キリストや父なる神に認められたものではなく、逆に聖書で非難されているのです！

「ホットクロスバンズ（十字型の筋の入ったパン）」の起源はどこにあるのでしょうか？

5番街のパレード、ホワイトハウスの芝生の上でのイースター・エッグ探し、早天礼拝、春の色、レストランやパン屋から通りへ漂う「ホットクロスバンズ」の芳しい香りー多神教に起源があるという知識などない、遠い昔の春の懐かしい思い出です。これが現在の「イースター」です。

子供達が小さなウサギのチョコレートを忙しく食べながら「イースター・エッグ」を芝生に隠し、「たくさんフリルのついたイースターの帽子をかぶって、(In Your Easter Bonnet, with all the frills upon it)」という歌が聞こえてくるでしょう。

こうした事は、全く無邪気で、家族的な行事に思えます。

このように無邪気に思える「ホットクロスバンズ」に多神教の起源があるのでしょうか？

ヒスロップは著しています。「聖金曜日のホットクロスバンズ、過越祭もしくはイースター・サンデーの色付けした卵は、カルデア人（バビロニア人）」が現在行っている儀式と関係がある。アテネを

創始したケクプロス王の時代である紀元前1500年頃には、「バンズ」は同じ名称で、天の女王、イスターの女神を崇拝するのに使われていた。ブライアントによると、バウン（Boun）と呼ばれる古代の神聖なパンの一種が神へ捧げられていた」（二つのバビロン、ヒスロップ著 108 ページ）

英語のこの語の起源は北欧のバウス（*Bous*）という言葉です。バウスは「ホルス（タカ神）」や「トール（おうし座）」、ブル（雄牛）を表わし、ニムロデに由来しています。現在でも多数の農民が自分達の牛を「ボス」や「ボッシー」と呼びながらも、その習慣の起源は全く知りません。バウスやバウンは、家族の行事として焼かれました。神の預言者、エレミヤがこれに関して述べたことに注目してください。「ユダの町々、エルサレムの巷で彼らがどのようなことをしているか、あなたには見えないのか。

「子らは薪を集め、父は火を燃やし、女たちは粉を練り、天の女王のために菓子を作り、異教の神々に捧げ物のぶどう酒を注いでわたしを怒らせている。

「彼らは私を怒らせているのか—と主は言われる—むしろ、自らの恥によって自らを怒らせているのではないか。

「それゆえ、主なる神はこう言われる。見よ、私の怒りと憤りが、この所で、人間、家畜、野の木、地の実りに注がれる。それは燃え上がり、消えることはない」（エレミヤ書7章17～20節）

神は反抗的な人間に大声で言われます。「異国の民の道に倣うな！」（エレミヤ書10章2節）

「ホットクロスバンズ」は種なしパンの祭りの期間に食べられる種なしパンの魔王の代用品なのです。「十字型」や「X印」は、「太陽の車」や太陽を表わす古代のシンボルで、「天の女神」もニムロデの母もしくは妻であるセミラミスも関係ありません。それらは共に、神を「神秘的なもの」として風変わりな異教の儀式によって崇拝する古代バビロニア神話に取り入れられたのです。

次に、早天礼拝に関する聖書の記述に注目しましょう。「彼はわたしを、主の神殿の北に面した門の入り口に連れて行った。そこには、女たちがタンムズ神（ニムロデ：太陽神）のために泣きながら座っているのではないか。

「そこで彼はわたしに言った。「人の子よ、見たか。あなたは、これより更に甚だしく忌まわしいことを見る」と。

「彼はわたしを主の神殿の中庭に連れて行った。すると、主の聖所の入り口で、廊と祭壇の間に、二十五人ほどの人がいて、主の聖所を背にし、顔を東に向けていた。彼らは東に向かって太陽を拝んでいるのではないか。（太陽は東から昇ります！これはまさに、日の出に太陽を拝む早天礼拝です！）

「彼は私に言った。「人の子よ、見たか。ユダの家がここで数々の忌まわしいことを行っているの些細なことであろうか。彼らはこの地を不法で満たした。また…わたしを更に怒らせようとしている。わたしも憤って行い、慈しみの目を注ぐことも、憐れみをかけることもしない。彼らが私の耳に向かって大声をあげても、わたしは彼らに聞きはしない」(エザキエル書8章13～18節)

これは、聖書において、人々が神の神殿に背を向け、日の出の太陽に顔を向けて太陽を拜んでいる様子を記した唯一の箇所です。

多神教のバビロニア人が現代に生き返ったならば、すぐに「イースターの早天礼拝」の意義を理解するでしょう。

背教者の教会は、どのようにしてキリスト教徒にアビブの14日の 主の晩餐を廃止させたのでしょうか

使徒達は、バビロンの捕囚時代からそのように呼ばれるようになったヘブライ暦の最初の月であるアビブもしくはニサンの14日に、キリストの傷ついた体と流された血の象徴を祝い続けました。「イースター」という語は、最古の聖書の記述のどこにも見当たりません。しかし、偽善的で不誠実な聖書の書写者達は、故意に「過越(Pasover: パスオーバー)」にあたるパスハ(Pasch)というギリシャ語を変更しました。パスハは、ヘブライ語のペサハ(Pesach)に由来しています。ラテン語に由来するスペイン語では、パスクア(Pascua)とされています。

聖なる神の言葉を意図的に改ざんした例として、使徒言行録12章4節に注目してください。前後の節も併記します。「そのころ、ヘロデ王は教会のある人々に迫害の手を伸ばし、

「ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。

「そして、それがユダヤ人に喜ばれるのを見て、更にペトロをも捕らえようとした。(それは、種なしパンの祭りの時期であった)

「ヘロデはペトロを捕らえて牢に入れ、四人一組の兵士四組に引き渡して監視させた。イースターの後で民衆の前に引き出すつもりであった」(使徒言行録12章1～4節) 欽定訳版聖書へのこの意図的な挿入は、全く不正なものであり、その挿入に関わった者は不正を認識していました。ギリシャ語の原典から直接逐語訳されたダイアグロット版では、次のように記しています。「…捕らえて牢に入れ、四人一組の兵士四組に引き渡して監視させた。過越の後で民衆の前に引き出すつもりであった」

新国際版では同じ節を次のように記しています。「捕らえて牢に入れ、四人一組の兵士四組に引き渡して監視させた。ヘロデ王は、過越の後で公開の裁きにかけるつもりであった」

新改訂標準訳では、次のように記しています。「彼を捕らえて牢に入れ、四人一組の兵士四組に引き渡して監視させた。過越の後で民衆の前に引き出すつもりであった」

ギリシャ語の第4節の各語を、原語に分類コードの番号をつけたストロング著、包括的用語索引(Strong's Exhaustive Concordance)で見てください。「Passover (過越)」にあたる Pascha (パスハ) という語に注意してください。「(捕らえた) *piazō* : G4084 .. (入れた) *tithemr* : G5087 .. (牢に) *phulake* : G5438 .. (引き渡す) *paradidomr* : G3860 .. (四つの) *tessares* : G5064 .. (四人組) *tetradion* : G5069 .. (兵士達) *stratiotes* : G4757 .. (監視させる) *phulasso* : G5442 .. (意図して) *bouleuo* : G1011 .. (後に) *meta* : G3326 .. (過越) *pascha* : G3957 .. (引き出す) *anago* : G321 .. (民衆) *laos* : G2992."」

では、ストロングの G3957 の語の定義を見てください。「3957. *pascha* (パスハ)、カルデア語の *pas'-khal* (パス・カ)、または[同H6453] *Passover* (パスオーバー; 過越)

ブリンガー博士著『コンパニオン・バイブル』(Companion Bible)の傍注に注目してください。「ギリシャ語の *Pascha* (パスハ) は、*Passover* (パスオーバー; 過越)。イースターは異教徒の語で、サクソンの女神エオストレ (*Eastre*) に由来し、シリア人の多産の女神であるアスタルテと同一であり、旧約聖書ではアシュトレト (*Ashtoreth*) とされた。

神の言葉は、神の言葉に背く者に罰を宣言されています。「この預言の書に言葉を挿入したり、その言葉から何か取り去る者」(ヨハネの黙示録22章19節) 靈感に満ちた文章に明白な異教の言葉を意図的に挿入しようと企む者は、自ら罪を負うことになるのです。

このような意図的な挿入は、背教者の教会がキリスト教徒に「イースター」押し付けたことを後押しすることになります。しかし、この強要には何世紀もかかりました！「ニカイア公会議以前の教父 (ante-Nicene Fathers)」という古代の書物では、教父と言うのは冒流的な呼称ですが、「(地上の者を『父』と呼んではならない」(マタイによる福音書23章9節)とキリストは命じられており、教父とは、自らの血と肉の父ではなく、教会の肩書を示します) その記述から、イエス・キリストが建てられた教会では、ニサン(14日)に主の晩餐が行われ続けていたことが明らかです。

カトリック百科事典 (*The Catholic Encyclopedia*) では次のように認めています。「アジア地域の教区では、古い伝統に従い(この点に注目してください!)、ユダヤ人が子羊を捧げるように命じられている月齢の14日目には、命を捧げる過越 (*pasch*)」の祝宴を必ず行い、その日が何曜日である

うと、その日に断食を終えなければならないと強く主張している（同書第5巻228 ページ）

しかし、キリストはいかなる「断食」も指示されていません。聖書で唯一指示されている断食は「贖罪の日」です。（レビ記23章27節、使徒言行録27章9節）カトリック百科事典のこの項目の著者は、「断食」が問題だったかどうか分からないような記述をすることによって、初期のキリスト教徒がニサンの14日の（一般的に「過越」と呼ばれる）主の晩餐を守っていたという重要な点をあいまいにしています。このような断食は単なる伝統であり、聖書の命令ではありません。当然、カトリックの著者達は、聖書のどこにも記されていない四旬節（Lent）を事実ししようと試みています。

続いて次の見え透いた記述に注目してください。「さらに、エイレナイオス（教父）はこう述べている。聖ポリュカルポスは他のアジア人（小アジアやパレスチナの人々を意味する）同様に、その日が何曜日であろうと月の14日目のイースターを守った。（このイースターという語は、意図的な挿入です！ポリュカルポスはアスタルテ以外、イースターという語を聞いたこともなく、使用することなどなかったでしょう！カトリックの著者は意図的に過越、パスハ（Pascha）を「イースター」としたのです）それは、使徒、聖ヨハネに由来するとポリュカルポスが主張する当時の伝統に従ったものであり、紀元約150年頃にこの問題に関してポリュカルポスはローマを訪問したが、十四日派の過越を廃止させようとした教皇アニケトウスの説得を受け入れなかった」（同書228 ページ、強調は筆者）

同著者は、この後の「イースター」の項目で、紀元325年に行われた、かの悪名高き「ニカイアの公会議」について記しています。「会議が定めた散漫な通告から、こう推論するのが妥当だろう。(1)イースターは世界中で同じ日曜日に祝われなければならない。(2)この日曜日は、14日目の、春分後の最初の満月のあとの日曜でなければならない。(3)その月は春分後の新月から数えて14日目の最初の満月とする…このニカイア公会議の決定は、あらゆる問題を解決するものでもなく、シリア人の間で一致して受け入れられるものでもなかった。大聖グレゴリウスの時代にイングランドにやって来たローマ人の宣教師達は、英国のキリスト教徒がローマ人自身が捨てた古代のイースターの時期の計算方法を守っていることを知った。英国のキリスト教徒は、ローマ人が大ブリテン島を占領していた時期（つまり、使徒パウロやその他の使徒達の時代です！）に伝えられたキリスト教の信者である。」（同書229 ページ）

再び、ここでも「イースター」という語は意図的に項目に挿入されています。しかし、使徒達は古代に使われていた異教の「多産の女神」であるアシュトレト、アスタルテ、という言葉の他にイースターという言葉など決して聞いたことはなく、厳粛かつ神聖な主の晩餐の祝いにこのような低俗な名称が使われることを聞けば、激怒したことでしょう！

カトリックの著者は当時の、物議をかもしている歴史的文献における多くの「不明瞭」な点を認めています。

こうした不明瞭さが、キリストが命じられたとして、キリスト教徒に14日の過越を祝うことを止めさせようとしたニカイアの公会議に達したのです。著者は記しています。「例えば、キリストの十字架での死（原文のまま）はニサンの14日なのか、それとも15日だったのか、という厄介な疑問がある。共観福音書の著者（聖マタイ、聖マルコ、聖ルカ）は15日、聖ヨハネは14日としているようだ」

しかし、共観福音書の著者（聖マタイ、聖マルコ、聖ルカ）は、15日を「支持」などしていません。キリストの死の翌日の安息日は「特別の日」、すなわち、（ニサンの月の15日に始まる）種なしパンの祭りの初日だったというヨハネの重要な記述があるので、キリストの死は、14日だったと認めざるを得ませんでした！

それは、その後のひどい迫害のきっかけとなりました。文字通り何世紀も、神の民はキリストが範を示されたように、主の晩餐をニサンの14日に祝い続けました。彼らは十四日派という冷笑的な名称で呼ばれ、容赦なく捕らわれ、殺されました。

ハレーの聖書ハンドブック（Halley's Bible Handbook）では、「宗教改革の先駆者達」という項目で次のように記しています。「フランス南部、スペイン北部、イタリア北部のアルビ派やカタリ派は、司祭職や巡礼の不道德、聖人や肖像の崇拜を非難した。また、聖職者や聖職者達の主張を完全に拒否し、教会の現状を批判し、ローマ教会の主張に反対した。彼らは聖書の言葉に重きを置き、禁欲生活を送り、道徳的な清潔さを熱望した。1,167年までに、フランス南部の人口の大部分が、そして1,200年までには、イタリア北部の多数が彼らの信奉者となった。1,208年、イノセント3世が十字軍を編成し、歴史に類をみない血塗られた皆殺しの戦いが起こった。多くの町々での戦いで、住民が年齢や性別に関係なく殺された。1,229年、異端審問が設けられ、100年もしないうちにアルビ派は完全に根絶された」歴史によると、「カタリ派」（「禁欲的な人」、あるいは「清潔な人」という意味）は、ブルガリアのボゴミール派の影響も受けていました。

ヨーロッパやイギリス諸島の何万という熱心なキリスト教徒は、主の晩餐を祝う真の日としてニサンの14日を守っていたこと、そしてその習慣が消滅するには何百年もかかったことを歴史が示しています。現在でも、ワルドー派の継承者がイタリアに存在し、イタリア最大のプロテスタント団体となっています。彼らの名称は、創始者ピーター・ワルドー、あるいはイタリア北部、スイス、フランスの人里はなれた高山地帯の溪谷に暮らす習慣等から名付けられました。ハレーの聖書ハンドブックでは次のように記しています。「ワルドーは、フランス南部、リヨンの裕福な商人で、自らの財産を貧しい者に分け与え、巡回説教を行った（1,176年）。聖職者の権力の不正取得や放蕩に反対し、聖職者のみが福音を説く権利を有することを拒絶し、ミサを拒否し、死者や浄罪のための祈りを拒否した。そして聖書が信条や生活の唯一の規範だと説いた。この説教によって、人々は聖書を読むことを切望するようになった。彼らは迫害を英雄的忍耐でしのぎ、今もなお唯一中世の教派が生き残っているアルプス溪谷南西のチュリン（トリノ）地域以外では、徐々に異端審問により抑圧された。イタリアで

は、現在有数のプロテスタント団体となっている」(785 ページ) ボゴミール派、アルビ派、ペトロ・ブルイス派、アルノルド派、ワルドー派、その他数多くの宗派は、彼らの敵によって名付けられ、その殆どが「異端派」とされました。異端派には、神の毎年の安息日を守る者や「安息日厳守主義者達」も含まれました。

「十四日派議論」が何世紀にも渡って論争となったのは、このように多くの人々がキリストご自身が命じられたように、キリストの傷ついた肉体と流された血の象徴をニサンの14日に祝い続けたからでした。

キリストの使徒達が「イースター (イシュタル)」を祝ったり、それを他の人々に祝うように促したということは、想像すら出来ないことなのです！

キリスト教の聖職者は年間の神の七つの聖なる日々深い意味をなぜ教えないのでしょうか？

現在、多数のキリスト教徒が毎朝、あるいは毎週、「聖体拝領」を受けています。一方、イエス・キリストを心から信じる何千もの人々は、毎年、通常「逾越祭」と呼ばれる「主の晩餐」を祝います。キリスト教徒は「聖体拝領」を毎週日曜日の朝に受けるべきでしょうか、あるいはキリストが弟子の足を洗い、彼らに種なしパンの一切れとワインの一口を与えられて、「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように」と言われたことに従うべきでしょうか？

なぜ多くの人々は、「祭日」と言われる年間の七つの神の聖なる日々深い意味を無視するのでしょうか？各祭日には、イエス・キリストの原型、影、暗示を多く含むキリストを中心とした日です。キリストは、逾越祭に生贄とされた子羊や、種なしパンを食べる際の「天から下ってきたパン」として、また、現在「ペンテコステ (聖霊降臨祭)」と言われる、初穂の祭りもしくは「安息の祭日」での「初穂」として描かれています。ペンテコステの日に聖霊を遣わされたのはキリストでした。また、ペンテコステのちょうど50日前の種なしパンの祭りの期間中にやってくる、週に一度の安息日に「初穂の束を揺り動かして捧げる」として描かれたのもキリストでした。「ペンテコステ」とは「50日目」を意味し、「安息日の祭日」あるいはその間の週に名付けられましたが、それは単にイスラエル人が、「7回目の安息日の翌日」が来たことがわかるように、従って「安息の祭日 (ペンテコステ)」がどの日になるのかがわかるように、7週間を数えるように言われたからです。

キリストは、ご自身が預言しておられた地上への再臨を告げる「トランペットの祭り (角笛祭)」の中心となる存在です。キリストは贖罪の日描かれている、贖罪の犠牲となっておられます。キリストは、人の肉体に33年と半年間「宿られ」、「幕屋の祭 (仮庵の祭)」のはっきりした原型です。キリストは、裁きの日とされる「最後の大いなる日」に大いなる審判をされる方です。そして1,000年間地上を統治される千年統治後に再臨されるのです。

新約聖書のイエス・キリストは、イスラエルの人々に与えられた年間のあらゆる安息日において中心となる方であるのに、どうしてこれほど多くの何方という「主流派」であるキリスト教の聖職者が神の聖なる日々を完全に無視するのでしょうか？

なぜ皆さんは、年間の聖なる日々に様々なキリストの原型が関連づけられていることを聞かれたことがないのでしょうか？

考えてみてください。日曜礼拝の教会の牧師が信徒に次のように語ったとします。「今後7週間、七つの説教を行います。それぞれ、イスラエルの人々に与えられた年間の聖なる日々に見られる、主イエス・キリストの原型や影が特徴となっています」もし牧師がそうしたなら、彼は賢明にこう付け加えるでしょう。「今後7週間、現在のキリスト教徒がそうした年間の聖なる日々を守る義務があるかどうかはともかく、代わりに、各祭日の価値を考えましょう。それぞれが神の計画、すなわち救世主の到来と死、埋葬、復活、そして地上への約束された再臨についてどのように描いているかを学びましょう」

このような牧師の聴衆は週を追うごとに増え、教区民は牧師の話に一心に耳を傾けるでしょう！しかし、厄介なことに、やがて教区民は牧師に、聖なる日々をなぜ彼らは守る必要がないのかを尋ね始めるでしょう。

皆さんが受けてきた宗教の教育では、こうした説教を聞かれたことはありません。それはどうしてでしょうか？

旧約聖書において、過越祭や種なしパンの祭りほど、キリストや父なる神、神の人類への計画の原型で満ちた聖なる日はありません。

残念ながら、多くのキリスト教の聖職者にとって、キリストご自身の教えに戻ることは異説となってしまいます！多くの人にとって、教会の伝統の方が大切なのです！

古代エジプトにおける最初の過越祭には、様々なキリストの影や原型が含まれていたことに注目してください。

歴史上最初の過越—それは唯一無比のものでした！

最初の過越は、歴史上、唯一無比の出来事でした。それは、ただ一度の出来事であり、神がエジプトに対して大いなる奇跡的な罰を下された時、苦難と死の時、神の民にとって脱出の時でした。

何世紀もの間、イスラエルの国民は奴隷となっていました。異教の迷信や偶像崇拜に取り囲まれて、季節の週の巡りや7日目の安息日の知識は失われていました。エジプトのイスラエル人は神の聖なる

曆を全く知りませんでした。最初の過越祭の直前に、神がモーセやアロンに聖なる曆の最初の月を教えられるまで無知でした。神は、年間の聖なる日々とその深い意義や週の安息日をイスラエルの人々に教え始められました。

注目してください。「エジプトの国で、主はモーセとアロンに言われた。この月をあなたたちの正月とし、年の初めの月としなさい」（出エジプト記12章1～2節）神は年の初めの月を「初穂の月」とされました。その名はアビブ（出エジプト記13章4節）で、後にニサンと言われました。（ネヘミヤ記2章1節；エステル記3章7節）

春の大麦の収穫月であるために「初穂の月」とされる月から始まるのは、ヘブライ曆の神聖な年の始まりの特徴です。

神がご自身の民を奴隷から救われる時が来ました。神が選ばれた国民としてイスラエルの国を建て、ご自身の名を彼らの間に置かれる時が来たのです。神は彼らに苦難とシナイの荒野での40年間の試練の時を耐えるようにされました。高齢世代は40年間の試練と苦難に耐えられませんでした。絶え間なく文句や愚痴、不満を述べた（聖書では"murmuring"とされています）彼らは結局その地で命を落としました。モーセは遠くから約束の地を見ることを許されましたが、彼もまた荒野で死を迎えました。最終的に、神はイスラエルの子孫が約束の地、パレスチナを相続するようにされました。

このことは、幕屋の祭（仮庵の祭）の特別な意義とともに、種なしパンの祭りだけではなく、最初の過越や神の全ての計画にとっても大きな霊的意義があります。「キリストのうちにある新しく造られた者」が洗礼と按手礼の時に各人に生まれるように（コリントの信徒への手紙2 5章17節）、「新しく造られた者」がイスラエルの母達が荒野にいる間にそれぞれの子宮に生まれました。私達が、民族や文化、歴史、言語、教育、政治、社会の背景といった現世の性質にとらわれがちのように、エジプトの地は私達が暮らす邪悪な世界の原型でした。私達は「既存」の世界の一部であり、その中で育ってきたのです。

荒野で死んだ高齢世代とは、洗礼式のプールで死ぬ私達の「古い人」（エフィソの信徒への手紙4章22節）の原型であり、それは古い自分の死と埋葬を象徴するものです。エジプトを知らない、荒野で生まれた若い世代とは、洗礼式で水から出て神の聖霊を受ける按手礼によって私達各人の内に生まれた、「キリストのうちにある新しく造られた者」を描いています。

神はご自身の霊で私達を作られ、私達を神の子とされます。その時が「キリストのうちにある新しく造られた者」の始まりとなります！新たな霊的なものは、古い物質的な肉体が減る一方、永遠に相続し、キリストの再臨時に一瞬のうちに変えられるのです。（コリントの信徒への手紙1 15章50～52節）

エジプトでの過越には様々な霊的な原型が関連付けられています。それらに注目してみましょう。

イスラエルの人々は、群れから傷のない子羊か子ヤギを選び出し（出エジプト記12章3～5節）、その月の14日まで取っておき、イスラエルの共同体の会衆が全員で夕暮れにそれを屠る（出エジプト記12章6節）と指示されました。小さな生まれたばかりの子羊ほど無力なものがあるでしょうか？私が子供の頃、近所の友人が子羊を飼っており、哺乳瓶を両手に抱えてミルクをやっていました。純真で完全な形の傷のない子羊は、イエス・キリストの原型でした。イエスの洗礼時、「見よ、神の子羊を」とヨハネは言いました。ヨハネの黙示録で、キリストは繰り返し「子羊」と呼ばれています。（ヨハネの黙示録14章1,4,10節；17章14節；19章7,9節；21章9節）

神はイスラエルの人々に指示されました。「その血を取って、子羊を食べる家の入り口の二本の柱と鴨居に塗る。

「肉は生で食べたり、煮て食べてはならない。必ず、頭も四肢も内臓も切り離さずに火で焼かねばならない。

「それを翌朝まで残しておいてはならない。翌朝まで残った場合には、焼却する」（出エジプト記12章6～10節）

明らかに、彼らは肉を「その夜のうちに（子羊を「夕暮れ」に殺したその夜のことで）」食べるようになっていたので、神の明白な指示に従った準備をするために、子羊は実際に食べられる前に十分な時間の余裕をもって殺されなければなりませんでした。

この特異な食事を、大急ぎで、不安におのきつつ、すぐに出発する用意をしつつ食べるようイスラエルの人々に指示するように、神はモーセやアロンに言われました。

動物を殺した後は、涼しい場所に吊るしておくのが通例でした。熟成させ、天候によりますが、数日あるいは1週間、またはそれ以上後に肉を解体するのです。

こうして、殺してからわずか数時間後に子羊（あるいは子ヤギ）を食べるということは、明らかに非常に急いだ異例の食事であり、緊急時の食事を象徴しています。

イスラエルの人々はこう言われました。「それを食べるときは、腰帯を締め、靴を履き、杖を手にし、急いで食べる。これが主の過越である。」

「その夜、わたしはエジプトの国を巡り、人であれ、家畜であれ、エジプトの国の全ての初子を撃つ。また、エジプトの全ての神々に裁きを行う。わたしは主である。

「あなたたちのいる家に塗った血は、あなたたちのしるしとなる。血を見たならば、わたしはあなたたちを過ぎ越す。わたしがエジプトの国を撃つとき、滅ぼす者の災いはあなたたちに及ばない」(出エジプト記12章11～13節)

腰帯を締めるとは、当時のスカートのような服を革の帯に押し込むことでした。走ったり早く歩く前には通常そのようにしました。靴は、一般的に屋内では履かなかつたので、靴を履いて食事をするとするのは異例な指示でした。靴を屋内で履かないというのは、今日でも中東や東洋の国々でよく見られる習慣です。屋外で履いた履物は、住居に入る際には屋外か玄関先に置かれました。後の、足を洗うという習慣(これはイエス・キリストの最後の晩餐の祝いにも関連します)から分かるように、召使が水を用意して大切な客人の足を洗ってから、客人はスリッパやサンダルを履くか、裸足で住居の床や絨毯にあがるのです。

杖やステッキは通常ドアの近くか玄関先に置かれます。しかし、イスラエルの人々は明らかに杖を手にして片手で食事をしよう指示されており、これは大急ぎであることを象徴しています。

この食事のあらゆる要素を考えてみてください。動物を殺してから間もなく食べています。(非常に異例です) また、杖やステッキを手に持ったままです。(これも異例です) つまり、家族の行事のようにゆっくりと訪問や食事を楽しむのではなく、食べ物を素早く食べており、こうした事全てが、直ちに出發する前の、不安におののいた大急ぎでとる食事であることを示しています!

後で見られるように、有名な、主イエス・キリストの「最後の晩餐」に繋がりが帰結する時系列的出来事が確実に起こっています。主の晩餐が行われた時が、過越と過越の子羊が殺された時と関係があることは、全く疑問の余地がありません。

しかし、イスラエルの人々が過越の食事をしたその夜にエジプトを脱出せず、死の天使が過越した後だと考える人や、さらにはイスラエルの人々が翌日エジプト人を略奪し、出エジプトは翌日の夜に始まったと考える人もいるため、多くの人が出エジプトや、過越の食事がいつだったのかということについて混乱してきました。

例えば、新約聖書でのイエス・キリストの肉と血の象徴(種なしパンとワイン)が古代の過越の晩餐と同じだったと理解していた人達は、種なしパンの祭りは7日間ではなく、8日間だと信じ始めました! 彼らの混乱は、新約聖書のキリストの有名な最後の晩餐が古代エジプトの過越の食事とまさに一致するという仮定から始まっています! 皆さんがはっきりお分かりのように、そうではありませんでした!

この仮定を受けて、多くの人々が過越祭(主の晩餐)に種なしパンとワインという象徴を分かち合ってきました。そして、ニサンの15日の前の日没までには家からあらゆる種(酵母)の入ったあらゆる食

べ物を取り除き、その前のニサンの14日の日中は、酵母の入った食べ物を採る習慣を不思議に思っていました。キリストの死を記念する儀式に関連して、種なしパンを一旦食べるのに、7日間の種なしパンの祭りが実際に始まる前、つまりニサンの14日の日中に種の入った食事をすることを不思議に感じています。

しかし、神は言われました。「7日間、あなたたちは種なしパンを食べる」また、「最初の月、14日の夕方からその月の21日の夕方まで、種なしパンを食べる」(出エジプト記12章18節)確かに、(14日を始まりとして、つまりこの期間の初日として)包括的に数えれば、明らかに8日間となってしまいます!

しかし、種なしパンを食べ始めるのを、14日の「夕方」、日没の直前とします。つまり、日没ぎりぎり(もしくは15日の始めまで)続けられれば何の問題もなくなります!そうすれば丸7日間と数時間になるでしょうが、8日間ではありません。

誠実な人々にとっての問題は有名なキリストの最後の晩餐に関する新約聖書の数字の誤解にあったのです!

種なしパンの祭りは7日間だけだったことは完全に明白です。(出エジプト記12章15,19節)

つまり、古代イスラエルの人々は過越の子羊と種なしパンを「その夜のうちに」(出エジプト記12章8節)つまり、15日の始まり、に食べたこともまた明らかなのです!最初の過越の一連の出来事を理解するためには、関連するあらゆる文章を比較しつつ、誤った仮定を避けて、注意深く、聖書を読まなければなりません。それでは、ご自身の聖書で、最初の過越の間に何が起こったかを読み、出エジプトはいつだったのかを理解しましょう。

二つの夕暮れの間

神はイスラエルの人々に指示されました。「それは(過越の子羊)、この月の十四日まで取っておき、イスラエルの共同体の会衆で皆で夕暮れにそれを屠り…その夜肉を食べる…」(出エジプト記6,8節)

ヘブライ語の「夕暮れに」という表現を巡っては、様々な意見が交わされてきましたが、厳密に言うと、これは「二つの夕暮れの間」という意味になります。ライトフットをはじめとして、この表現は日没後、あたりが真っ暗になる前までを指すと考える人達があります。これが間違っているならば、彼らは過越の子羊を殺して、過越の食事で食べられるのを13日の終わりの時と14日の始めの時だと考えたこととなります。神は日没から一日を始めておられることを思い出してください。従って、14日の「二つの夕暮れの間」に過越の羊を殺すことになっていたならば、そしてその「二つの夕暮れ

の間」が日没後、あたりが真っ暗になる前を意味するなら、^{すぎこし}過越の羊は、13日が終わった後の夕方遅く、つまり14日が始まった後に食べられたことになるでしょう！

「^{ふた}二つの夕暮れの間」という表現の正確な意味について、^{せいしよぶんがくひやつかしてん}キッターの聖書文学百科事典では次のように記しています。「^{でんとうてき}伝統的に...^{ふた}二つの夕暮の間という表現は、午後から日が沈むまでを意味すると^{かいしやく}解釈される。^{さいしよ}最初の夕暮れは太陽が垂直にある^{しやうご}正午の時点から^{にし}西に傾き始める時に始まり、^{つぎ}次の夕暮れは太陽が沈み見えなくなる時からとなる。これは、^{せいざん}生贄が^{きんよう}金曜の午後12時30分に殺されていたと^{かんが}考えられるからである。(ミシュナ、ペサーヒーム第1巻 (*Mishna, Peasachim*) ; マイモニデス著、ヒルコス、コルバン、ペサハ (*Maimonides, Hilchoth, Korban, Pesach* 1章4節) しかし、^{すぎこし}過越の子羊は、^{せいざん}生贄の後に殺されたので、^{つうじやうご}通常午後2時30分から^{ごご}午後5時30分の間に殺されたと考えられる。キリスト教の優れた解説書やスミスの辞書 (*Smith's Dictionary*) での過越に関する優れた項で繰り返してはつきり断定されていなかったらば、ユダヤの伝統を忠実に守るサンディア、ラシ、キムチ、ラルバグ等は古代ユダヤ人の規範の定義を支持し、あるいはジャルチやキムチが、^{ふた}二つの夕暮れとは日没直前・直後を指し、^{にちぼつ}日没の時点が^{ふた}二つの夕暮れを分ける時だと考えていた、と付け加えるのは蛇足だろう。

ラシは、次のように断言している。「太陽は夕暮れにかけて沈み始めるので、^{むつ}六つめの時(12時)とそれ以降が^{ふた}二つの夕暮れの間と言われていた。従って、私は^{ふた}二つの夕暮れの間とは、その^ひ白の夕暮れとその夜の夕暮れの間^の時間を指すと思う。その^ひ白の夕暮れとは、^{なな}七つめの時(正午の直後)から始まる、夕暮れの影が伸び始める時であり、一方、その夜の夕暮れとは、^{よる}夜の始まりである。(出エジプト記12章6節の解釈)」キムチもほぼ文字通り同じことを言っている。「^{ふた}二つの夕暮れの間とは、太陽が^{にし}西に傾き始める時、つまり^{むつ}六つめの時(12時)以降である。^{ふた}二つの夕暮れがあるので、^{ふた}二つの夕暮れの間と言われる。太陽が沈んだ後がもう一つの夕暮れであり、その間の時間が^{ふた}二つの夕暮れの間とされている」(用語集、同項目より)

^{じよじし}叙事詩オデッセイ (*Odyssey*) 17巻の注釈では、ギリシャ人にも^{ふた}二つの夕暮れがあり、^{いちにち}一日の終わりを後の夕方と呼び、^{あつ}正午直後に始まる方を先の夕方と呼んでいた、とエウスタティオスが示している。(参照、ボシヤール・ヒエロゾイ著、第一部、第2巻、第1章、559ページ 1,712年編)

「夕暮れ(イブニング)」という語は単に「^{すいへい}水平にすること」を意味します。多くの人が夜の早い時間もしくは午後の遅い時間に友人に会うと「^{ぐど}グッド・イブニング」というように、イブニングという言葉は一般的に使われています。しかし、^{いっぼんてき}一般的な英語の言葉が、^{えいご}英語という言語が存在する何千年も前から現存しているヘブライ語の本当の意味を示すとは限りません。「^{ふた}二つの夕暮れの間」という言葉は実際には、^{てんちやう}天頂(正午)からの時間、すなわち^{さいこうてん}最高点にある太陽が傾き始め、「^{たいやう}太陽が消える」日没となる時までに「^{すいへい}水平になる」ことを意味しました。ですから、^{せいざん}生贄となった子羊はニサン^のの14日の午後2時30分頃からそれ以降に^{せいざん}生贄にされたのです。

しかし、私達は言語や習慣を憶測する必要はありません。というのも、出エジプト記12章6節にある「夕暮れに」と訳された「二つの夕暮れの間」という表現によって、それがどの時間なのかに関しては、聖書の記述と言う反論の余地がない証拠があるからです。

神は言われました。「…そしてその夜、肉を食べる」(出エジプト記12章8節) このことは、子羊(子ヤギ)は、日没前の数時間の間に殺されたことを証明しています。過越の食事はニサンの15日の早い時間(日没後数時間以内)に終わりました。「七日の間、あなたたちは種なしパンを食べる。まず、祭りの初日に家から酵母を取り除く。この日から第七日までの間(包括的に数えて、全部で7日間です)に酵母入りのパンを食べた者は、すべてイスラエルから断たれる。(出エジプト記12章15節) 7日間のみを包含するには、種なしパンの祭りの期間は(ニサンの)15日に始まらなければならない、家から酵母を取り除く過程は、過越の食事の用意の前、つまり14日に完了しなければなりませんでした。」

そうではなく、もし、最初の過越が13日の直後、14日の始まりだったとすれば、種なしパンの祭りの期間は8日間になってしまいます！

しかし聖書では、種なしパンの祭りの期間は7日間のみであったとしています！

更なる証拠に注目してください。「第一の月、14日の夕暮れからその月の21日の夕方まで、種なしパンを食べる」もし、13日の終わり、つまり14日の始めからこの期間を数え始めたとしたら、8日間となり、7日間にはなりません。「その月の14日の夕暮れに」という表現は14日の終わり、つまり15日が始まろうとする時だという意味であって、そうでなければ種なしパンの祭りの期間は8日間になってしまいます。

種なしパンの初日は14日ではなく、15日です。しかし酵母を家から取り除き、子羊(子ヤギ)を殺すことを含めて、過越の食事の準備は14日の遅くに行われました！従って、イスラエルの人々の家では種なしパンの祭りが始まる前の14日の遅くから丸7日間と数時間酵母が取り除かれていたことになるでしょう。これが「準備」の日の目的です。その表現を覚えておいてください！キリストは、ニサンの14日の屋下がりまで杭の上におられ、大祭司が最初の過越の子羊を殺したまさにその時に亡くなりました！彼らはキリストの埋葬を急ぎました！なぜでしょう？「その日は準備の日で、翌日は特別の安息日であったので、ユダヤ人たちは、安息日に遺体を十字架(ギリシャ語でスタウロス(stauros)、垂直の柵あるいは杭を意味し、「木」と訳されることが多い)の上に残しておかないために、足を折って取り降ろすように、ピラトに願い出た」(ヨハネによる福音書19章31節)「特別の安息日」は年間の聖なる日でした！キリストの死の直後の聖なる日は、種なしパンの祭りの初日、ニサンの15日でした！

更に注目してください。「その日はユダヤ人の準備の日であり、この墓が近かったので、そこに(ゴルゴタの丘の麓の新しい墓)イエスを納めた」(ヨハネによる福音書19章42節)

何百万という誠実な、教会に通うキリスト教徒はこの聖書の記述について全く理解していません。キリストが亡くなった週の真実の出来事に関して全く理解していません。もし理解しているというならば、キリストが亡くなったのは水曜日であり、水曜日の午後遅くに埋葬され、丁度72時間、つまり三日三晩墓の中におられて、自らが言われた通りに安息日の午後遅くに復活されたということがわかるでしょう！

注目してください！「つまり、ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、大地の中にいることになる」（マタイによる福音書12章40節）これは、キリストご自身が真の救世主であると、この世に残された唯一の永遠のしるしであることにも注目してください！キリストは言われました。「イエスはお答えになり、彼らに言われた。よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがるが、預言者ヨナのしるしのほかに、しるしは与えられない」（マタイによる福音書12章39節）そして、キリストは、丁度三日三晩「大地の中」つまり墓の中にいることになると言われたのです！

数えてみてください！「聖金曜日」の日没から安息日の日没までは一日一晩です。安息日の日没から日曜日の日没までは二日二晩です。日曜日の日没から月曜日の日没までが三日三晩です！

神の真実に関して議論しようとする人達は、キリストは一日の一部、一晩の一部だけを意味されたのだと主張してきました！しかし、これはナンセンスです。キリストははっきりと「日」と「晩」と言われており、一日と一晩で、通常私達が24時間とする期間を言われていたことは明らかです。

イエスが三日三晩と言われた際は「ギリシャ語の慣用句」が使われたのだ、と主張する人達もいます。しかし、キリストは「預言者のヨナのしるし」と言われており、ヨナの書は、ギリシャ語ではなく、ヘブライ語で書かれていました！人は自分達が作り出した伝統に固執するために、神の明白な命令に従うことを避けようとして、どんなことでもするのです！

「聖金曜日」、イースター・サンデーの朝の伝統は全くの間違いです！キリストが埋葬されたのは金曜日ではなく、木曜日の特別な安息日の前である水曜日でした。その後、金曜日に毎週の安息日のための準備がされ、亡くなれてから丁度三日三晩後の通常の毎週の安息日にキリストは復活されたのです。

それでは、歴史上最初の過越の間の「二つの夕暮れの間」という表現の意味に戻りましょう。

神は言われました。「七日の間、家の中に酵母があってはならない」（出エジプト記6章19節）

更なる証拠に注目してください。「アビブ（初穂）の月を守り、あなたの神、主の過越祭を祝いなさい。アビブの月に、あなたの神、主が夜の間に、あなたをエジプトから導き出されたからである。

あなたは、主がその名を置くために選ばれる場所で、羊あるいは牛を過越のいけにえとしてあなたの神、主に屠りなさい。

「その際、酵母入りのパンを食べてはならない。七日間、酵母を入れない苦みのパンを食べなさい。あなたはエジプトの国から急いで出たからである…七日間、国中どこにも酵母があつてはならない。祭りの初日の夕方屠った肉を、翌朝まで残してはならない。」(申命記16章1~4節)

これは、羊が生贄とされたのは、14日の遅く、すなわち7日間の種なしパンの祭りの初日である15日が始まる日没直前だったという更なる証拠です。

「夕方」という表現に関して「白 (day)」という語の聖書における用法に注目してください。

「幕屋を立てた白 (on the day)、雲は掟の天幕である幕屋を覆った。夕方になると、それは幕屋の上にあつて、朝まで燃える火のように見えた。

「いつもこのようであった、昼 (by day) は雲は幕屋を覆い、夜は燃える火のように見えた」(民数記9章15,16節)

出エジプトはいつだったのでしょうか？

イスラエルの人々がラメセスからストコへの旅に向かうために、ゴシェンの家を出発した(民数記33章4,5節)の夜だったというのは、疑う余地がありません！

神は一日を日没に初めておられることを思い出してください。したがって一日の夜間の部分は、その前の日没から始まる一日の最初の部分になります。では、アビブの月のどの日にイスラエルの人々は、ラメセスを出発したのでしょうか？

「彼らは、第一(アビブ)の月の十五日にラメセスを出発した。すなわち、過越の翌日、イスラエルの人々は、すべてのエジプト人の目の前を意気揚々と出て行った」(民数記33章3節)

このように、イスラエルの人々が、15日の、しかも夜に、エジプトを出て行ったのは明らかです！つまり、彼らは、死の天使が過越した「翌日」、アビブの15日の夜のいずれかの時間帯にエジプトを出て行ったことになります！

最初の過越祭の指示を思い出してください。「それはその月の十四日まで取り分けておき、イスラエルの共同体の会衆が皆で夕暮れに(14日の夕暮れです！)それを屠り」その血をとって子羊を食べる家の入口の二本の柱と鴨居に塗る。

「そしてその夜(「夕暮れ」つまり14日の遅くに羊を生贄として殺した後の日没後、夜遅くの暗い間)肉を火で焼いて食べる。また、酵母を入れないパンを苦菜を添えて食べる。

「肉を生で食べたり、煮て食べてはならない。必ず、頭も四肢も内臓も切り離さずに火で焼かねばならない。

「それを翌朝まで残してはならない。翌朝まで残った場合には焼却する。

「それを食べる時は、腰帯を締め、靴を履き、杖を手にし、急いで食べる。これが主の過越である」(出エジプト記12章6～11節)

羊を殺し、準備して、焼いた肉を急いで食べる夕食には少なくとも数時間はかかります。より短時間に数十万の人たちがそうしたことを行うのは困難です。特に過越の羊を殺す際は、殺す場所を選び、流れた血を桶に注意深く集め、ヒソップの枝を桶に浸す儀式を経て、その血を入口の柱とまぐさ石に入念に塗るなど、ある程度の儀式も行われたでしょう。

動物は「野外で下ごしらえされた」だけで、完全に解体されたのではありませんでした。「頭と内臓も切り離さず」に火で焼かねばならないというのは、動物が入念に内臓を取り去り、解体されたのではなく、丸ごと焼かれたという意味であることに注目してください。

「夕方」つまり午後の終わりに殺され、その後まもなく焼き始めたのですから、肉が急いで食べられるようになるには、焼き始めてから数時間程度はかかったでしょう。

神は、イスラエルの人々が緊急事態のごとく食事をしよう意図されました！すぐに出発できるように(男性の場合は杖を手に)、靴を履き、服を革の腰帯へ押し込み、片手に荷物を持ったまま片手で食事をし、片手で焼いた肉を食べました！不安と恐怖におののき、大急ぎで食事をしたのです！

更に注目してください。「真夜中です(15日です!)」になって、主はエジプトの国で全ての初子を撃たれた。王座に座しているファラオの初子から牢屋につながれている捕虜の初子まで、また家畜の初子もことごとく撃たれたので、

「ファラオと家臣、またすべてのエジプト人は夜中に起き上った。死人が出なかった家は一軒もなく、大いなる叫びがエジプト中に起こった。

「ファラオは、モーセとアロンを夜のうちに呼び出して言った。(注目してください！すでに死の天使は過ぎています！モーセとアロンは、彼らが殺されないように死の天使が過ぎ去った「朝」まで家の外に出てはいけないという命令に含まれていたにもかかわらず、ファラオは人々の代表として、

この二人の指導者を呼び出しました。彼らがこれに従ったのは、すでに危険が過ぎ去っていたからです！彼らは家を出てファラオ宮殿へ向かいました！」「さあ、わたしの民の中から出て行くがよい、あなたたちもイスラエルの人々も。あなたたちが願っていたように、行って、主に仕えるがよい。

「羊の群れも牛の群れも、あなたたちが願っていたように、連れて行くがよい。そして、わたしをも祝福してもらいたい。」

「エジプト人は、民をせきたてて、急いで国から去らせようとした。そうしないと自分たちは皆、死んでしまうと思ったのである。

「民は、まだ酵母の入っていないパンの練り粉をこね鉢ごと外套に包み、肩に担いだ。

「イスラエルの人々は、モーセの言葉どおりに行き、エジプト人から金銀の装飾品や衣類を求めた。（求めたのです：出エジプト記3章21～22節、11章2節を参照してください）

「主は、この民にエジプト人の好意を得させるようにされたので、エジプト人は彼らの求めに応じた。（喜んで与えました）彼らはこうして、エジプト人の物を奪い取った。

「イスラエルの人々はラメセスからスコトに向けて出発した。一行は、女性と子どもを別にして、徒歩の男子だけでおよそ六十万人であった。

「そのほか、種々雑多な人々もこれに加わった。羊、牛など、非常に多くの家畜も彼らと共に上った。

「彼らはエジプトから持ち出した練り粉で、酵母を入れないパン菓子を焼いた。練り粉には酵母が入っていなかった。彼らがエジプトから追放されたとき、ぐずぐずしていることはできなかつたし、道中の食糧を用意するいとまもなかつたからである。」（出エジプト記12章29～39節）

真夜中からの数時間のうちの大規模な出発でしたから、切迫した出発に間に合わせる食事として道理にかなった結果です！次の聖書の言葉に注目してください！エジプト人は彼らをせきたてた。彼らは「追放」された。「ぐずぐずしていることはできなかつた」、「道中の食糧を用意することができなかつた」、人々は「大急ぎで」食べた。

イスラエルの人々が、極めて手短な食事を用意し、直ちに出発できるように腰帯をしめ、片手に杖を握り、不安と恐怖におののきながら片手で食事をする事、また翌日の日中、12時間以上もかけてエジプト人のものを「奪い取る」ことを十分理解しつつもそれを無駄に行う「ふりをする」ことを、神は意図されたものではありませんでした。

そうではなく、「追放」された、あるいはエジプト人は彼らを「せきたてた」といった言葉が聖書に記載されており、イスラエルの人々はアビブの15日の夜間、夜明け前にラメセスを出発したことを決定的に証明しています。

明らかに、「夜明けまで」外へ出てはならないという命令は、死の天使が通り過ぎた後に解除されました！疫病はもう終わったのです。イスラエルの国民の原型として、モーセとアロンがファラオの宮殿に急いで呼び出されました。彼らはそれぞれの家の中で、他の人々と同じように家の入り口の門柱とまぐさ石にはっきりと血を塗り、過越の羊を食べていましたが、死の天使は既に過越で国から去っていたので、家から出て全く安全だったのです。

申命記16章1節の言葉に注目してください。「アビブの月を守り、あなたの神、主の過越祭を祝いなさい。アビブの月に、あなたの神、主が夜の間に、あなたをエジプトから導き出されたからである」

様々な長老達による民族の系統的な組織が（出エジプト記6章9～27節）、ファラオが彼らを荒野へすぐにも出発させるだろうという告知を繰り返すことで、この命令が週のいかなる時にでも発せられるかもしれないと予期し、遅くとも1時間程度という短時間のうちに、長老から下の者に至るまで連絡が行き渡ったのです！

新約聖書の過越

最初の過越は歴史上類を見ないものでしたが、イエス・キリストの「最後の晩餐」も同様に特異なものでした。歴史では、最初の過越を「追放前の」過越としていますが、これは、イスラエルの人々がエジプトから追放された後の過越の祝い方と著しい違いがあり、また、彼らが約束の地に到着して神殿が建てられた後の祝い方にも少し変化が見られるためです。

イエス・キリストは、幼い頃からご両親とともに過越を祝っておられたのは明らかです。ルカの記述に注目してください。「さて、両親は過越祭には毎年エルサレムへ旅をした。

「イエスが十二歳になったときも、両親は祭りの慣習に従って都に上った。

「祭りの期間が終わって帰路についたとき、少年イエスはエルサレムに残っておられたが、両親はそれに気づかなかった」（ルカによる福音書2章41～43節）

そして少年イエスがいかに神殿で学者達を驚かせられたか、ご両親に「父の業を行う」必要があると言われたかという説明が続きます。

キリストの地上での最後の過越祭の出来事に関する完璧な記述がヨハネによる福音書13章にあります。しかし、キリストこそがその年の過越祭の犠牲であられたので、キリストは過越祭を祝ってはられません。

13章の主要部分です。「さて、過越祭の前のことである。イエスはこの世から父のもとへ移るご自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」この晩餐が、ニサンの15日の過越祭の祝宴の前に行われたことに注目してください！

また、イエスはご自分の死の時が近いことを知っておられたことにも注目してください。イエスは、まもなく「この世から父のもとへ移る」をご存知でした。数年前、イエス・キリストを自分のアイデンティティを捜し求める不安な若者として描いた、退屈で背教的な、そしてなんともばかげた「イエス」の映画が公開されました！この映画の歪んだストーリーによると、彼は内なる葛藤と常に戦い、人生における自分の真の場所を知りませんでした！しかし、神の言葉では、キリストは御父と一緒におられたご自身の存在以前の状態をご存知だったことが明らかです。キリストはユダヤ人に言われました。「…アブラハムが生まれる前から、私はある」

「夕食が終わろうとするとき（イワン・パニン (Ivan Panin)スコフィールド (Schofield),改訂標準版、分類解説書 (Critical Commentary)等、他の翻訳では「夕食のとき」としています。）既に悪魔は、イスカリオテのシモンの子ユダに、イエスを裏切る考えを抱かせていた。

「イエスは父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また、ご自分が神のもとに帰ろうとしていることを悟り、

「食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。

「それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとまった手ぬぐいでふき始めた。

「シモン・ペトロのところに来ると、ペトロは、「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださるのですか」と言った。

「イエスは答えて、「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」と言われた。

「ペトロが、「私の足など、決して洗わないでください」と言うと、イエスは、「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかわりもないことになる」と答えられた。

「そこでシモン・ペトロが言った。「主よ、足だけでなく、手も頭も」

「イエスは言われた。「すでに体を洗った者は、全身清いのだから、足だけ洗えばよい。あなたがたは清いのだが、皆が清いわけではない。」

「イエスは、御自分を裏切ろうとしている者が誰であるかを知っておられた。それで、「皆が清いわけではない」と言われたのである。

「さて、イエスは、弟子たちの足を洗ってしまうと、上着を着て、再び席に着いて言われた。「わたしがあなたがたにしたことが分かるか。

「あなたがたは、私を『先生』とか『主』とか呼ぶ。そのように言うのは正しい。わたしはそうである。

「ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなた方も互いに足を洗い合わなければならない。

「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである」(ヨハネによる福音書13章1～15節) イエスはペトロが他の者の足を洗うべきだとか、ペトロが仰々しい儀式で一人の足を洗わなければならないとは言われていません！イエスは、互いに足を洗い合わなければならないと言われたのです！

それはいつでしょう？

弟子たちはその夜すぐに向き合ってお互いの足を洗い始めてはいません！次の逾越祭の時期が来た時に、キリストがされたことを見習うように、キリストは彼らに模範を示されました！彼らに模範を示され、キリストが彼らにされたように彼らがすることを命じられたのです！

更に注目してください。「はっきり言っておく。僕は主人にまさらず、遣われた者は遣わした者にまさりはしない。

「このことが分かり、そのとおりに実行するなら、幸いである」(ヨハネによる福音書13章16,17節) 主の晩餐の時に足を洗うというキリストが命ぜられた習慣を行っている教会を皆さんはご存知でしょうか？私は知っています。いくつかの教会がその習慣を行っていますが、そうした教会は全て、神の言葉、神の律法、つまり年間の安息日と聖なる日を信じ、キリストが「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと」言われた意味を信じて安息日を守っている教会です。

キリストの弟子達が、キリストが足をあらわれた儀式を真似るといふ最初の機会は翌年だったでしょう！

最後の晩餐で、他にどのようなことが起こったのか注目してください。「一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた。「取って食べなさい。これはわたしの体である。」(マタイによる福音書26章26節) パンがご自身の体を象徴するものであるとキリストが暗示されたのは言うまでもありません。この明白な例を、パンが実際にキ

リストの体となったという「神秘」であるかのように推論しようとしてきた見当違いの人達があります。
(神の預言者達は、彼らは真実を「神秘的な」宗教に変えようとするだろうと警告していました)
パンとぶどう酒がキリストの体と血に真に変化するという「化体説」の教義は全くの誤りです！

「また、杯を取り、感謝の祈りを唱え、彼らに渡して言われた。「皆、この杯から飲みなさい。

「これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。

「言うておおくが、わたしの父の国であなたがたと共に新たに飲むその日まで、今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい。」

「一同は賛美の歌をうたってから、オリーブ山へ出かけた」(マタイによる福音書26章26~30節)

歴史上このようなことはかつてありませんでした。このかつてない、類をみない晩餐で、イエス・キリストは種なしパンをご自身の「傷つく」体の象徴として示されました。(キリストは太い鞭でひどく打たれ、槍で傷を受けましたが骨は折れていません)そして、ワインは全ての人類の罪のために流されるキリストの血の象徴でした。

この晩餐は過越の羊が殺される約17~24時間前に行われました！

それでは、過越祭の前の最後の6日間にイエス・キリストが行われたことをたどってみましょう。

ルカによる福音書19章1~28節に、イエスがエルサレムに近づいておられたことが著されています。イエスはザアカイに会われ、彼の家にその夜泊まられると言われました。そしてポンド(お金)の例え話をされました。(ルカによる福音書19章1~10節)「イエスはこのように(ポンドの例え話を)話してから、先に立って進み、エルサレムの上って行かれた」(ルカによる福音書19章28節)この時点で、マタイの記述に移り(マタイによる福音書21章1~7節)、イエスがエルサレムに輝かしく入られる際に乗られるろばについて、イエスが弟子達にされた指示を読む必要があります。これらは全て、過越祭の6日前、現在の木曜日の日没から金曜日の日没にかけてのニサンの9日の出来事でした。

神殿を清められた後(マタイによる福音書21章12~16節)、イエスはその夜のベタニアに戻られます。
(マタイによる福音書21章17節、ヨハネによる福音書12章1節)

「過越祭の六日前に、イエスはベタニアに行かれた。そこには、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロがいた」(ヨハネによる福音書12章1節)翌日、イエスは安息日をベタニアで過ごされ、その夜の日没後(過越祭の5日前でニサンの10日、現在の金曜日の日没だったでしょう)、3回の夕食の最初の夕食は、ほぼ間違いなくラザロの家で行われました。ここで、マリアがイエスの足に香油を塗った様子がヨハネによる福音書12章2~8節に著されています。

翌日、イエスはベタニアからエルサレムへ向かわれ、大勢の群集に会われ、都のために泣かれ、神殿に入られます。(マルコによる福音書11章1～11節、ルカによる福音書19章29～44節、ヨハネによる福音書12章12～19節参照)

これらは全て過越祭の4日前、現在の土曜日の日没から日曜日の日没にかけてのニサンの11日の出来事でした。

翌朝、過越祭の3日前、現在の日曜日の日没から月曜日の日没にかけてのニサンの12日、イエス・キリストはエルサレムに戻られ、実をつけないことへの罰を弟子達へ示されるために、いちじくの木を呪われました。(マタイによる福音書21章18～22節)そして神殿に入られました。

「それから、一行はエルサレムに来た。イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いしていた人々を追い出し始め、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けをひっくり返された。また、境内を通過して物を運ぶこともお許しにならなかった。そして人々に教えて言われた。「こう書いてあるではないか、『わたしの家は、すべての国の人の祈りの家と呼ばれるべきである。』ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にしてしまった。」

「祭司長たちや律法学者たちはこれを聞いて、イエスをどのようにして殺そうかと謀った。群集が皆その教えに感動していたので、彼らはイエスを恐れたからである。

「夕方になると、イエスと弟子たちとは、いつものように都の外に出て行った。」(マルコによる福音書11章12～19節)

おそらく、イエスはこの時、イスラエルを出た後ベタニアに戻られたのでしょう。

翌日は過越祭の2日前、現在の月曜日の日没から火曜日にかけてのニサンの13日でした。

「朝はやく道をとおっていると、彼らは先のいちじくが根元から枯れているのを見た。

「そこで、ペテロは思い出してイエスに言った、「先生、ごらんください。あなたがのろわれたいちじくが、枯れています」

「そこで、イエスは言われた。神を信じなさい。

「はっきり言うておく。だれでもこの山に向かい、『動き出して、海に飛び込め』と言い、少しも疑わ

ず、自分の言うとおりにになると信じるならば、そのとおりになる。

「だから、言うておく。祈り求めるものはすべて既に得られたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになる。

「また立って祈るとき、だれかに対して、何か恨み言があるならば、ゆるしてやりなさい。そうすれば、あなたがたの天の父もあなたがたのあやまちをゆるしてくださるであろう。

「もしゆるさないなら、あなたがたの天の父もあなたがたの過ちをお赦しにならない。

「一行はまたエルサレムにきた。イエスが神殿の境内を歩いておられると、祭司長、律法学者、長老たちがやって来た」(マルコによる福音書11章20～27節)

過越祭の2日前の詳細に関しては、マタイによる福音書21章23～29節、ルカによる福音書20章全章、ルカによる福音書21章4～38節も参照してください。

イエスが二つの偉大な預言をされたのはこの日です。神殿での最初の預言をはじめとして(ルカによる福音書21章5～36節)、次のオリーブ山での偉大な「オリーブ山の預言」へ続きました。(マタイによる福音書24章1～51節)

私達ははっきりとつげられています。「イエスはこれらの言葉をすべて語り終えると(オリーブ山の預言とマタイによる福音書25章の警告です)、弟子たちに言われた。あなたがたも知っているとおりに、二日後は過越祭である。人の子ははりつけにされるために引き渡される。」(マタイによる福音書26章1,2節)

この一日の出来事には、マタイによる福音書26章、27章、マルコによる福音書14章、15章、ルカによる福音書22章、23章、ヨハネによる福音書13章から19章と、多くのページが割かれています。

ユダの裏切りと最後の晩餐の準備についての記述を見てみましょう。

「そのとき、十二人の一人で、イスカリオテのユダという者が、祭司長たちのところへ行き、あの男をあなたたちに引き渡せば、幾らくれますか」と言った。そこで、彼らは銀貨三十枚を支払うことにした。そのときから、ユダはイエスを引き渡そうと、機会をねらっていた」(マタイによる福音書26章14～16節)

マルコの記述(マルコによる福音書14章10,11節)もほぼ同じです。ユダヤ人の家庭では、わずかの酵母(パン種)であっても探し出すという過越祭の「準備」がニサンの14日に始まりますが、実際には7日間

の種なしパンの祭りには含まれないものの、この習慣がイエス・キリストの時代までに、一般的に「種なしパンの最初の白」と言われるようになったことを憶えておく必要があります。この白は酵母を探し出し、各家庭から酵母を取り除く白でしたから、「種なしパンの最初の白」とされるようになったのです。「過越」と言う言葉もまた、その最初の意味よりもはるかに広義で使えるようになりました。

既に見てきたように、最初の「過越」は、歴史上類をみない出来事でした。ファラオの初子を撃った死の天使がイスラエルの人々を「過越」たのです。

しかし、この言葉は羊を殺すことを含めて儀式自体に使われるようになりました。

最終的には、酵母を探し、酵母を家から取り除くという準備、過越（もしくはペサハ）の晩餐、そして7日間の種なしパンの祭りを全て併せて、この期間全体を指すようになりました。

これは、ユダの裏切りを記したルカによる福音書に示されています。「さて、過越祭といわれている除酵祭（種なしパンの祭り）が近づいていた」（ルカによる福音書22章1節）種なしパンの祭りと過越祭は二つの別々の行事だったという事実にも関わらず、二つを併せた集合的な言葉がこれほど昔から使われるようになったのです。

四つの福音書の中でも、イエスの有名な最後の晩餐に関する使徒ヨハネの長い記述は類を見ないものです。

マタイによる福音書26章26～29節、マルコによる福音書14章22～25節でも類似の記述がされています。

過越祭の前日、ニサンの14日の「準備の日」の出来事を完全に理解するために、以下の聖書の記述を調べて読んでください。

過越祭の前の最後の日、ニサンの14日の「準備の日（ヨハネによる福音書19章31節）」、イエスが亡くられる日の出来事です。

（現在の火曜日の日没から水曜日の日没に当たります）*

キリストを裏切るユダの企み：

マタイによる福音書26章14～16節、マルコによる福音書14章10、11節、ルカによる福音書22章1～6節

最後の晩餐の「準備」：

マタイによる福音書26章17～19節、マルコによる福音書14章12～16節、ルカによる福音書22章7～13節

「夕方になる」；裏切りの企み：

マタイによる福音書26章20節、マルコによる福音書14章17節

最後の晩餐；足を洗う：

ヨハネによる福音書13章1～20節

裏切りの告知：

マタイによる福音書26章21～25節、マルコによる福音書14章18～21節、ヨハネによる福音書13章21～30節

晩餐；パンとワインによる「新たな契約」の提示：

マタイによる福音書26章26～29節、マルコによる福音書14章22～25節、ルカによる福音書22章14～23節

ペトロの離反についての最初の予告：

ヨハネによる福音書13章31～38節

一番偉いものに関する論争：

ルカによる福音書22章31～34節

ペトロの離反についての二番目の予告：

ルカによる福音書22章31～34章

ゲッセマネへ行く：

マタイによる福音書26章30～35節、マルコによる福音書14章26～29節、ルカによる福音書22章39節、ヨハネによる福音書18章1節

ペトロの離反についての三番目の予告：

マルコによる福音書14章30～31節

庭での苦悶：

マタイによる福音書26章36～46節、マルコによる福音書14章32～42節、ルカによる福音書22章40～46節

キリストの逮捕：

マタイによる福音書26章47～56節、マルコによる福音書14章43～50節、ルカによる福音書22章47～54節、ヨハネによる福音書18章2～11節

ラザロの逃亡：

マルコによる福音書14章51,52節

火曜日の夜通し行われた裁判：

マタイによる福音書26章57節、27章31節、マルコによる福音書14章53節、15章19節、ルカによる福音書22章54節、23章25節、ヨハネによる福音書18章12節、19章13節

「六つめの時（現在の火曜日の真夜中）」、ピラトによる演説「見よ、あなたたちの王だ」：

ヨハネによる福音書19章14,15節

処刑のために引き渡されるキリスト：

マタイによる福音書27章31～34節、マルコによる福音書15章20～23節、ルカによる福音書23章26～31節、ヨハネによる福音書19章16,17節

罪状書きに関するピラトとの議論：

ヨハネによる福音書19章19～22節

分けられた服：

マタイによる福音書27章35～37節、マルコによる福音書15章24節、ルカによる福音書23章34節、ヨハネによる福音書19章23～34節

「三つめの時、彼らはイエスをはりつけにした」（現在の水曜日午前9時）：

マルコによる福音書15章25,26節

「六つめの時（現在の水曜日正午）」と暗闇：

マタイによる福音書27章45～49節、マルコによる福音書15章33節、ルカによる福音書23章44,45節

「九つめの時（現在の水曜日午後3時）」キリストは叫ばれ、杭の上で亡くなられた：

マタイによる福音書27章50節、マルコによる福音書15章34～37節、ルカによる福音書23章46節、ヨハネによる福音書19章28～30節

その後の多くの出来事：

マタイによる福音書27章51～56節、マルコによる福音書15章38～41節、ルカによる福音書23章47～49節、ヨハネによる福音書19章31～37節

キリストは、「特別の日」(種なしパンの祭り初日、年間の安息日)の前の日没前(現在の水曜日午後6時頃の日没の前)に大急ぎで埋葬された:

マタイによる福音書27章57~66節、マルコによる福音書15章42~47節、ルカによる福音書23章50~56節、ヨハネによる福音書19章31~42節

*ブリンガーの必携聖書 (Bullinger's Companion Bible) 別表156,157,158 ページより

それでは、学んだことを復習してみましょう。聖書から明らかなように、彼らは、種なしパンの祭りの初日である、「特別の」安息日が始まる前にイエス・キリストを完全に埋葬するために急ぎました。

(ヨハネによる福音書18章31節)この年間の安息日、種なしパン祭りの初日は、ニサンの15日であり、現在の水曜日の日没から木曜日の日没にあたります。

これが、イエスが墓に入っておられた間の一日一晩目でした。

キリストが亡くなられたまさにその時に過越の羊が生贄にされたことを信じるに足る理由があります!キリストは「私達のために過越の犠牲となられた方」であり、キリストは神が常に物事を時間通りに行われることをご存知であるからこそ、祭司長が最初の過越の羊を殺す時にキリストが最後の言葉を発せられるという、完全な象徴としての図式が完成されるのです。

ブリンガー博士の必携聖書 (Companion Bible) では次のように記しています。「従って、「準備の日」にはりつけにされた主が、ニサンの14日の夜(つまり午後)まで殺されなかった過越の羊を召し上がることができなかったということがわかる。その日、日々の生贄は六つめの時(正午)に殺され、七つめの時(午後1時)頃まで捧げられた。過越の羊を殺すことはその後が始まった。主が十字架(原文のまま)にかけられた後4時間ほど経った後に過越の羊を殺すことが始まり、それが主が「息を引き取られた」九つめの時(午後3時)に終わっていなければ、その前夜の「最後の晩餐」で「過越の羊」が食べられることがなかったのは明白である。」

ヨハネによる福音書19章31節の「特別な日」が祭りの初日だったという聖書の記述は、反論の余地のない事実です!聖書によると、その日は、ニサンの15日でなければなりません!

祭りの2日目、ニサンの16日は現在の水曜日の日没から金曜日の日没にあたり、キリストが墓におられた二日二晩目の夜でした。種なしパンの祭りの3日目は週の安息日でニサンの17日、現在の金曜日の日没から土曜日の日没にあたり、キリストが墓におられた三日三晩目となります!

キリストは水曜日の午後遅くに埋葬されたのですから、正確に三日三晩後は週の安息日の午後遅くとなり、マタイによる福音書16章21節とその後の節にある「三日目」になります。

聖書によると、翌朝、「まだ暗いうちに、…週の初めの日の明け方に」(マタイによる福音書28章1節)

女性達が墓にやってきて、イエスがすでにおられないことを発見しました。

注目してください！「週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。

「そこで、シモン・ペテロのところへ、また、イエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行って彼らに告げた。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」

「そこで、ペトロとそのもう一人の弟子は、外に出て墓へ行った。

「二人は一緒に走ったが、もう一人の弟子の方が、ペトロより速く走って、先に墓に着いた。

「身をかがめて中をのぞくと、亜麻布が置いてあった。しかし、彼は中には入らなかった。

「続いて、シモン・ペトロも着いた。彼は墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。

「イエスの頭を包んでいた覆いは、亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあった。

「それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。

「イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。

「それから、この弟子たちは家に帰って行った。

「マリアは墓の外に立って泣いていた。泣きながら身をかがめて墓の中を見ると、

「イエスの遺体の置いてあった所に、白い衣を着た二人の天使が見えた。一人は頭の方に、もう一人は足の方に座っていた。

「天使たちが、「婦人よ、なぜ泣いているのか」と言うと、マリアは言った。「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」

「こう言いながら後ろを振り向くと、イエスの立っておられるのが見えた。しかし、それがイエスだとは分からなかった。

「イエスは言われた。「婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。」マリアは、その人が園の番人だと思って言った。「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのが教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。」

「イエスは彼女に「マリアよ」と言われた。マリアはふり返って、イエスにむかってヘブライ語で「ラボニ」と言った。それは、先生という意味である。

「イエスは彼女に言われた、「わたしにさわってはいけない。わたしは、まだ父のみもとに上っていないのだから。ただ、わたしの兄弟たちの所に行って、『わたしは、わたしの父またはあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上って行く』と、彼らに伝えなさい」(ヨハネによる福音書20章1～17節)

ルカは次のように記しています。「そして、週の初めの日の明け方早く、女性達は準備しておいた香料などを持って墓に行った。

「ところが、石が墓からころがしてあるので、中にはいってみると、主イエスのからだが見当たらなかった。

「そのため途方にくれていると、見よ、輝いた衣を着たふたりの者が、女性達の近くにきた。

「女性達が恐れて、顔を地に伏せていると、このふたりが言った。「あなたがたは、なぜ生きた方を死者の中に捜しているのか？」

「その方は、ここにはおられない。復活されたのだ。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出さなさい。

「人の子は必ず罪人らの手に渡され、はりつけにされ、そして三日目に復活することになっている、と言われたではないか。

「そこで、女性達はイエスの言葉を思い出した。

「そして、墓から帰って、十一人とほかの人皆に一部始終を知らせた」(ルカによる福音書24章1～9節)

再び、日曜日の朝まだ暗いうちに、イエス・キリストが既に復活されていたことがわかります！イエス・キリストは「イースター」サンデー（日曜）の朝に復活されたものではありません。まだ日が昇っていない、暗いうちに、すでに墓は空だったのです！

マタイの記述に注目してください。「さて、安息日が終わって（安息日Sabbathは、複数ではSabbatonとされますが、特別な安息日であるニサンの15日、あるいは種なしパンの祭りの初日と、その二日後の

週の安息日の両方を指すには"Sabbaths"という複数形にした方が良いでしょう！)週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った。

「すると、見よ、大きな地震が起こった。主の天使が天から降って近寄り、石をわきへ転がし、その上に座ったのである。

「その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった。

「見張りをしていた人たちは、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。

「天使は婦人たちに言った。「恐れることはない。あなた達のはりつけにされたイエスを捜しているのは、私は分かっているが、

「あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり(かねて言われていたことは、墓に三日三晩おられるということです)、復活されたのだ。(過去形です。イエスは何時間も前にすでに復活されていたのです) さあ、イエスが納められていた場所を見なさい。

「そして、急いで行って、弟子たちにこう伝えなさい、『イエスは死人の中から復活された。見よ、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。そこでお会いできるであろう』あなたがたに、これだけ言うておく」

「婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った(マタイによる福音書28章1~8節)

天使は、「あの方は、ここにはおられない。復活されたのだ！」と言いました。復活は、過去の行為、すでに成し遂げられた、既に起こった、事実でした！当然です！「かねて言われていたとおりに」(6節) その前日の午後遅くに、実際に墓から復活されていたのです！

「イースターの早朝」の伝統は全くの誤りです！それは、完全に異教の伝統で、古代の太陽信仰を引き継ぎ、人としてのキリストの最後の日々に関する神の真実を巧妙に覆い隠し、後の世代に残すとキリストが言われた、またキリストが墓におられる期間を示す唯一のしるしをあいまいにしているのです！

イエス・キリストこそが**超越**そのものです！

キリストは**超越**とされました。イエス・キリストこそが**超越**です。従って、イエスのご自身の傷ついた体と流れる血とされた象徴を私達が分かち合う時には、私達は古い契約の**超越**を守るのではありません。私達は、キリストの死の象徴を受けます！パウロは書きました。「いつも新しい練り粉のままでいられるおように、古いパン種(精神的なもの)をきれいに取り除きなさい。現に、あ

あなたがたはパン種^{だね はい}の入っていない者^{もの にくたいてき}（肉体的なもの）なのです。キリストが、私達^{わたしたち}の過越^{すぎこし}として私達^{わたしたち}のために犠牲^{ぎせい}となられたからです。

「ゆえに、わたしたちは、古いパン種^{だね}や、また悪意^{あくい}と邪悪^{じゃあく}のパン種^{だね}を用いずに、パン種^{だね}のはいっていない誠実^{せいじつ}と真実^{しんじつ}というパンで、祭^{まつり}（種なしパンの祭り！）をしようではないか」（コリントの信徒への手紙^{てがみ}1 5章^{しやう}7,8節^{せつ}）

この力強い記述^{ちからづよ きじゆつ}は、コリントの異邦人^{いほうじん}（非ユダヤ人^{ひ ぎやうかい}）の教会^あに宛てて、キリストの死^し、埋葬^{まいそう}、そして復活^{ふっかつ}から約30年後^{やく ねんご}に書かれました。「ユダヤ人^や」に宛てたものではありませんでした。パウロは、ユダヤ人^{じん}ではなく、異邦人^{いほうじん}（非ユダヤ人^{ひ ぎやうかい}）に対しての使途^{たい}でした！この一節^{いつせつ}が種なしパン^{たねなしぱん}の祭り^{まつり}の期間^{まかん}に読まれたのでなければ、その中の言葉^{なかに}と真っ向^{まっかう}から矛盾^{まひん}します！パウロが、彼ら^{かれら}が種なしパン^{たねなしぱん}の祭り^{まつり}を祝^{いわ}っていたということを意味^{いみ}したのでなければ、パウロは彼ら^{かれら}が精神的^{せいしんてき}に「高ぶる^{たかぶる}」ことに関してこれほどきっぱりとたしなめ（コリントの信徒への手紙^{てがみ}1 4章^{しやう}6,18,19節^{せつ}、5章^{しやう}2節^{せつ}）、「あなたがたは、パン種^{だね はい}の入っていない者^{もの}なのです」と言^いったはずがありません！パウロは、彼ら^{かれら}がすでに肉体的^{にくたいてき}にパン種^{だね はい}の入っていない者^{もの}となっていたように、精神的^{せいしんてき}にパン種^{だね はい}の入っていない者^{もの}になるよう促^{うなが}したのです。

神^{かみ}はイスラエルの人々^{ひとびと}に、祭り^{まつり}の7日間^{なつかん}、種なしパン^{たねなしぱん}を食べるよう命^{めい}じられました。それにはキリストを中心^{ちゆうしん}とした深い意味^{いみ}があります。注目^{ちゆうもく}してください！「よくよくあなたがたに言^いっておく。私^{わたし}を信^{しん}じる者^{もの}には永遠^{えいえん}の命^{いのち}がある。わたしは命^{いのち}のパンである。あなたがたの先祖^{せんぞ}は荒野^{こうや}でマナを食べたが、死^しんでしまった。しかし、天^{てん}から下^{くだ}ってきたパンを食べる人は、決して死ぬ^{しぬ}ことはない。わたしは天^{てん}から下^{くだ}ってきた生^いきたパンである。それを食べる者^{もの}は、いつまでも生きるであろう。わたしが与えるパンは、世^よの命^{いのち}のために与^{あた}えるわたしの肉^{にく}である…人^{ひと}の子^この肉^{にく}を食べず、また、その血^ちを飲^のまなければ、あなたがたの内^{うち}に命^{いのち}はない。わたしの肉^{にく}を食べ、わたしの血^ちを飲^のむ者^{もの}には、永遠^{えいえん}の命^{いのち}があり、わたしはその人^{ひと}を終^{おわ}りの日^ひによみがえらせるであろう。（これは明らかに象^{しやう}徴^{てい}化^かです）わたしの肉^{にく}はまことの食物^{たべもの}、わたしの血^ちはまことの飲^のみ物^{もの}である。わたしの肉^{にく}を食べ、わたしの血^ちを飲^のむ者^{もの}は、いつもわたしの内^{うち}におり、わたしもまたいつもその人^{ひと}の内^{うち}にいる」（ヨハネによる福音書^{ふくいんしょ}6章^{しやう}44~58節^{せつ}）

これは多くの弟子^{おお}がキリストのもとを去^さる結果^{けつこ}となった非常^{ひじょう}に「困難^{こんなん}な言葉^{ことば}」でした。

彼ら^{かれら}はこのような言葉^{ことば}を聞^きいたことはありませんでした！彼ら^{かれら}は反発^{はんぱつ}しました！キリストはペトロの方^{かた}を向^むかれ、ペトロもまた去^さるのかと尋^{たず}ねられました。ペトロは答^{こた}えました。「主^{しゅ}よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠^{えいえん}の命^{いのち}の言葉^{ことば}を持^もっておられます」（ヨハネによる福音書^{ふくいんしょ}6章^{しやう}68節^{せつ}）

キリストは、パンとワインはご自分^{じぶん}の肉^{にく}と血^ちの象^{しやう}徴^{てい}だと示^{しめ}されて、歴^{れき}史^し上^{じやう}類^{るい}をみない儀^ぎ式^{しき}を行^{おこな}われ

ました！弟子達との「最後の晩餐」は、ユダヤ人の過越祭ではなく、これまで見てきたように、キリストご自身によって行われた、新たな契約の儀式という比類なき出来事だったのです！足を洗う儀式や、非常に象徴的なパンとワインを分かち合うことが行われました。

私達は、この新たな契約の儀式に参加する際に、キリストの時代以前にさかのぼって考える事をしません。私達はキリストが亡くなられた時に関心は向けませんが、古代の出エジプトやエジプトでの捕囚時代に関しては興味深い歴史や背景としてしか考えません。

イエス・キリストが新たな契約の儀式を行われたのです！イエスがその権限をもっておられました！イエスがその権威でした！イエスは言われました。「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように！」

パウロは異邦人のコリント人に言いました。「わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、裏切られて引き渡されるその夜、パンを取り、

「感謝の祈りをささげてそれを裂き、「これは、あなたがたのために裂いたわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。

「食事のあと、杯も同じように取られて言われました。「この杯は、私の血による新しい契約である。飲むたびに、わたしの記念として、このように行いなさい」

「だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです

「従って、ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に對して罪を犯すことになる。

「だれでもまず自分をよく確かめ、それからパンを食べ杯を飲むべきである。

「主の体のことをわきまえずに飲み食いする者は、飲み食いによって自分自身に対する裁きをしている。

「そのため、あなたがたの間に弱い者や病人がたくさんおり、多くの者が死んだのです」（コリントの信徒への手紙1 11章23～30節）「ふさわしくないままで」という言葉は、パンやワインを分かち合う、悔い改めた信者の現在の霊的状態を指しているではありません。コリント人の中には「主の晩餐」を、酔っ払うまで酒を飲み、お腹一杯食べ物をつめ込むような大騒ぎの暴飲暴食の酒宴にしてしまった者もあり、そうした言語道断の無礼を指しているのです。パウロは書きました。「あなたがたの間で、だれが適格者かはつきりするためには、仲間争いも避けられないかもしれません。

「それでは、一緒に集まっても、主の晩餐を食べることにならないのです。

「なぜなら、食事のとき各自が勝手に自分の分を食べてしまい（「早い者勝ち」で、暴食の者がいる一方遅れて来た人には食べ物が無い状態）、空腹の者がいるかと思えば、酔っている者もいるという始末だからです。

「あなたがたには、飲んだり食べたりする家がないのですか？それとも、神の教会を見くびり、貧しい人々に恥をかかせようというのですか。わたしはあなたがたに何と言ったらよいのだろう。ほめることにしようか。この点については、ほめるわけにはいきません」（コリントの信徒への手紙1 11章19～22節）これは、主の晩餐を「ふさわしくないままで」行っていることをパウロが指したものでした。私達自身の力では、キリストが流された血の一滴にすら「値する」といえる人など誰一人いないのですから、このような厳粛で意義深い象徴を分かち合うのに、キリスト教徒として私達が「ふさわしい」と感じるかどうかという事は関係がありません。

神の教会は、キリストの傷ついた体と流された血の象徴は、イエス・キリストが行われたのと正確に同じ時、つまりニサンの14日の始めに授けられなければならないことを紀元1世紀から理解していました。

キリストが示された範と命令を守り、神の教会はニサンの14日の始め、13日が終わった日没後、伝統的に（誤りではありませんが）「過越祭」と言われる厳粛な礼拝に集うのです。この誤称は長年にわたって引き継がれてきました。キリストが私達のための犠牲、「過越」となられたのですから、実際は、これは「過越祭」ではありません！

真のキリスト教徒は主の晩餐を祝うでしょう

年間を通じて主の晩餐ほど重要な儀式はありません！主の晩餐は、他の何よりも救済の方法を象徴している祝祭です！イエス・キリストの傷ついた体と流された血がなければ、私達の罪を贖うためにキリストが流された血を、私達が深い悔恨と謙虚、感謝の気持ちで受けることがなければ、私達は救われません！

キリストの傷ついた体と流された血を毎年受けて再確認することで、私達は、救済のために、唯一イエス・キリストのみへの私達の信仰を再確認し続けます。皆さんが、間もなく訪れる輝かしい全能の神の御国へ入ることを真に期待するならば、地上で千年間キリストと共に生き、統治する者の一人となることを望むならば（ヨハネの黙示録20章4節、5章10節）、年ごとの主の晩餐を守る必要があります。

私達の神は慈悲深い方です！神は言っておられます。「わたしは、彼らの不正、罪、不義を許し、もはや彼らの罪を思い出しはしないからである」（ヘブライ人への手紙8章13節）今年、そして人の肉体としてこの世に留まっている間の毎年、皆さんは救世主であり間もなく皆さんの王となられる主イエス・キリストの肉と血の象徴を分かちあわなければなりません！

神の民である他の人々の今年の「過越祭」（主の晩餐）の礼拝に関する情報、ご自宅の近くの礼拝については、私達の公認教会もしくは未公認の共同団体に、お電話かお手紙でお問合せください。

健康状態もしくは遠距離のために私達の仲間とお会いになれない方には、ご自宅での過越祭の過ごし方について説明させていただきます。牧師が不在の共同団体を主催している方は、過越祭の礼拝のビデオをお求めください。

救世主の犠牲の象徴を毎年分かち合うことによって謙虚な服従と深い感謝で神に従う皆様に、神が靈感をおあたえくださいますように！

— おわり —

この資料は、変更することなく無料で著者と出版社に配慮した上で、コピーして友人や家族に配布することができます。一般大衆向けに出版することはできません。

この出版物は個人的な研究手段として利用されることを対象としています。人の言葉を何でも受け入れるのは賢明ではないということを知っていただき、全ての問題をあなたの聖書の中から自分で証を立てるようにしてください。

ガーナーテッドアームストロング福音協会

私書箱 747 Flint、テキサス 75762

電話番号: (903) 561-7070 . Fax: 561-4141

当福音協会のウェブサイトでは多くの文献が無料で入手できます。

www.garnertedarmstrong.ws

ガーナテッド・アームストロング福音協会の活動は、キリスト教徒とイエス・キリストの教えに従って福音を説く協力者からの自発的な十分の一税、奉納及び献金で成り立っています。